みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

北太平洋沿岸諸文化の比較研究に関する一構想
(平成6年度函館人文学会年次大会報告)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5789

平成6年度函館人文学会年次大会報告

平成6年11月24日(木)・25日(金)の両日、16時30分より教育大学函館校大会議室において平成6年度函館人文学会年次大会が開催されました。本大会における研究発表の要旨を以下に掲載し、大会報告といたします。

北太平洋沿岸諸文化の比較研究に関する一構想

北海道教育大学函館校　　岸　上　　伸　啓

今世紀の初頭に行われたジェサップ北太平洋探検隊の調査以来、北米北西海岸インディアンとオホーツク海地域の先住民の間に、サケ儀礼やワタリガラス神話など文化的類似性が見られることが認識されてきた。その後、1960年代に米国のチャードらによって北太平洋沿岸諸文化の共通性の解明の重要性が指摘されたが、米ソ冷戦のためユーラシア極東部での現地調査や米ソの学者間での共同研究はほとんど行われなかった。

1980年代に入り、旧ソ連が欧米自由主義国に学術交流の門戸を開き始めたのを契機に、米国スミソニアン研究所のフィッチュウはロシア人研究者と協力して、シベリアとアラスカの19世紀の社会と物質文化に力点を置きながら、両大陸間の先史、歴史や民族文化を比較検討するという博物館展示とシンポジウムを行い、その成果を出版した。一方、戦後の日本のアイヌ研究をリードしてきた渡辺仁は、北太平洋地域の諸民族の間には、言語や社会の点で地域的な差異が見られる一方、文化的な共通点や類似点が存在し、この地域全体を一つの文化圏として研究するべきだと提唱した。そして渡辺は住生活、食生活、社会生活、戦争や物質文化に着目し、その共通性を例証してきた。

これまでの成果を概観すると、この地域での交易、宗教、社会構造や社会文化変容の過程については詳細な比較研究がいまだなされておらず、今後の重要な研究課題であると言える。報告者は、北太平洋沿岸諸文化に見られる共通性と差異を説明するための人類史モデルとして (1)文化の同一起源拡散モデル、(2)環境適応モデルおよび (3)適応拡散／相互交流モデルを紹介し、3番目のモデルの有効性を主張した。また、今後の研究の方向として、(1)当該地域に関する既存の研究成果や資料のデータベースづくりの必要性、(2)学際的かつ多国籍の研究協力及び情報交換体制づくりの必要性、(3)共通の枠組みのもとでのデータ収集に基づく個別諸文化の比較歴史研究の必要性および (4)先住民族文化の現状を比較研究する必要性を指摘した。